

「旧約の信仰者たちの手本」 ダビデ ② (11:32~34)

■はじめに

1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。
- (4) 警告は、肉体の滅びを招くということであって、霊的な救いを失うことではない。

2. 手紙の内容と11章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。時代を追って、
 - ① 族長時代以前：アベル、エノク、ノア
 - ② 族長たちの時代：アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ
 - ③ 出エジプトから荒野の旅：モーセの両親、モーセ、イスラエルの人々、ラハブ
 - ④ 士師記の時代前期から二人の士師、ギデオンとバラク（時期的にはバラクが先）
 - ⑤ 士師記の時代後期から二人の士師、サムソンとエフタ（時期的にはエフタが先）
 - ⑥ 士師記の時代の後、王ダビデと最後の士師であり預言者であるサムエル
 - ⑦ 「預言者たち」は原文では、「またダビデとサムエルと預言者たち」とあり、サムエルの後に続いた預言者たちを指している。
- (3) 前々回は「サムエルの晩年とダビデの登場」、前回は「ダビデ① 20歳から30歳【王となる】まで」、今回は「ダビデ② 30歳から50歳【ソロモンの誕生】まで」。

■前々回の内容 サムエルの晩年とダビデの登場 (BC1028 - BC1020)

1. ペリシテ人との戦い、サウル王の失格 (13:1~14:46) BC 1028頃と推定
2. サウル王の努力 (14:47~52) とアマレク聖絶命令に対する違反 (15章)
3. 少年ダビデへの油注ぎ (16:1~13)
4. サウルから主の霊が離れ、悪霊におびやかされる (16:14~23)
5. ペリシテ人ゴリアテと少年ダビデとの戦い (17章)
6. ダビデの登用とサウルの恐れ、ダビデはサムエルのもとへ (18章・19章)
 - (1) 18:1~4 この箇所焦点は、ダビデの登用というよりも、ヨナタンがダビデを

自分と同じほどに愛し、ダビデと契約を結んだことにあてられている。

- (2) 19:1~8 サウルは、ダビデを殺すことを息子ヨナタンや家来全部に告げた。ヨナタンはダビデを隠し、父にとりなす。サウルは聞き入れ、誓ったので、ダビデは復職する。このあと、サウルはまたダビデを殺そうとする。
 - (3) 19:18~24 ダビデは、ラマのサムエルのところに行き、サウルが自分にしたこと一切をサムエルに話した。そして サムエルと、ナヨテに行って住んだ。
 - (4) このとき、主の幕屋に仕えるレビ族の役割と組織的編成について話し合われたものと推定される (I 歴 9:22 「ダビデと予見者サムエルが彼らの職責を定めたのである」)。これが約 20 年後、ダビデが全イスラエルの王となり、エルサレムを王都としたときに実行され、賛美礼拝となる。
7. ダビデはサウルの子ヨナタンのもとへ、ヨナタンはダビデを逃がす (20 章)
 8. ダビデの逃亡、ノブ (祭司の町) → ガテ (ペリシテ人の町)、狂人を装う (21 章)
 9. アドラムのほら穴 (400 人) → モアブのミツパ (両親を預ける) → ユダの地・ハレテの森、サウルはノブの祭司たちを虐殺、祭司エブヤタルがダビデのもとへ (22 章)
 - (1) 22:1~2 400 人の者が彼といるようになった。
 10. ケイラ救援、しかしサウルの追手がかかり、ケイラを出て、ジフの荒野へ「仕切りの岩」の出来事、さらにエン・ゲディの要害へ (23 章)
 - (1) 23:13 ダビデとその部下およそ 600 人は・・・
 - (2) 23:16~18 ジフの荒野のホレシュにて、ヨナタンが来てダビデを、神の御名によって力づけた。「恐れることはありません。私の父サウルの手があなたの身に及ぶことはないからです。あなたこそ、イスラエルの王となり、私はあなたの次に立つ者となるでしょう。私の父サウルも、そうなることを確かに知っているのです。」
こうして、ふたりは主の前で契約を結んだ。
 11. サウルがダビデを追ってエン・ゲディの荒野へ「上着のすそ」、サウルとダビデの約束 (24 章)
 12. 25:1 サムエルの死、ダビデ【20 歳】はラマを弔問し、パランの荒野へ BC1020

ダビデは、少年のときに預言者サムエルから油を注がれる。少年らしい一途な信仰でゴリアテを倒し、サウルに登用されるが、ダビデに自分の地位が脅かされると恐れたサウルに命を狙われることになる。不安と恐れの中にあつたダビデを支えたのは、第一にヨナタン (サウルの子であるが、ダビデを愛し契約を結んだ友)、次に預言者サムエル (師)、そして神が集めてくださった勇士たち (最初は 400 人、間もなく 600 人) であつた。
逃亡中のダビデ 20 歳のときに、サムエルがこの世を去る。

■前回の内容 ダビデ① 20 歳から 30 歳【王となる】まで (BC1020 - BC1010)

1. ダビデ 20 歳、パランの荒野へ。アビガイルとの出会いと結婚 (25 章)
 - (1) ユダの地域のカルメルにて、アビガイルを通して語られた主のみこころ (28~31 節)「むだに血を流したり、自分で復讐したりして、心の妨げとならないように・・・」
2. ジフの荒野での試み (26 章)・・・カルメルでの経験が前提にある
 - (1) 主がサウルたちを深い眠りに陥れる (12 節)

- (2) しかし、ダビデはサウルを殺さなかった (8~11 節)
3. ペリシテ人の王 (ガテの王アキシユ) に身を寄せ、ツィゲラクを拠点とする (27 章)
- (1) 27:7 ダビデがペリシテ人の地に住んだ日数は1年4か月であった。→ ダビデが28歳の頃と推定される。サムエルが死んでから8年、逃亡はその前から始まっていて、おそらく逃亡生活が10年を超えた時期。
- (2) 27:1 ダビデの心の中の不安 「私はいつか、いまに、サウルの手によって滅ぼされるだろう。・・・」
- (3) ガテに来たのは2回目。前回は疑われ、狂人を装って窮地を脱した。今回はサウルから追われて約10年、ガテの王アキシユはダビデたちの寄留を許す。
4. サウル率いるイスラエルとペリシテ人との戦い。その前夜、サウルは霊媒にサムエルの霊を呼び出すよう依頼 (28 章)
- (1) 3 節 霊媒や口寄せとは
- ① 霊媒 : オウブ 「親しい霊」という名の悪霊
- ② 口寄せ : イドデー オニィ 「ヤウダー知る」に由来。男の魔法使い。千里眼、透視能力者、超能力者を含む。
- (2) 霊媒や口寄せは、悪霊と交信をする者たちである。
- (3) 6 節 サウルは主に伺ったが、主が夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても答えてくださらなかった。
- ① サウルは信仰をもって主のみこころを求めたのではない。だから、何の答えもないとなると、霊媒を頼った。
- ② I 歴 10:13~15 不信の罪
- (4) 12~13 節 霊媒の女は、いつものようにオウブ「親しい霊」を呼び出そうとしたら、いつものとは全く違う情景が見えて驚愕する。こうごうしい方が地から上ってくる。同時に、自分の前にいる依頼者は、変装しているが、サウル王であると知らされる。
- (5) 14~25 節 サムエルの霊魂が、地から上って来て、サウルの前に現れる。そして、明日の戦いでサウルは敗れ、息子たちとともに死ぬであろうと告げる。
5. ダビデとその部下は、ガテの王アキシユの軍に従軍し、ペリシテ軍の中にいたが、他のペリシテ人の領主たちの反対で、ペリシテ軍から外される (29 章)
6. ダビデとその部下がツィゲラクに帰ると、アマレク人の略奪隊に襲撃された後であった。女と子どもたちが全員連れ去られていた。ダビデたちは3日間の行程差を追跡して、奪還 (30 章)
- (1) 4~5 節 ダビデも、彼といっしょにいた者たちも、声をあげて泣き、ついには泣く力もなくなった。ダビデのふたりの妻、イズレエル人アヒノアムも、ナバルの妻であったカルメル人アビガイルも連れ去れていた。
- (2) 6 節 ダビデは非常に悩んだ。民がみな、自分たちの息子、娘たちのことで心を悩まし、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したからである。しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った。
- (3) 部下たち 600 人については、I 歴 12:1~21 「彼らはダビデを助けて、あの略奪隊に当たった。みな勇士であり、将軍であった」

7. イスラエルの敗北、3人の息子たちの戦死とサウルの自決 (31章)
8. ダビデの「弓の歌」(IIサム1章) 26節「私の兄弟ヨナタンよ。あなたは私を大いに喜ばせ、あなたの私への愛は、女の愛にもまさって、すばらしかった。」
9. ダビデ 30歳、ユダの王となる (IIサム2:1~7)

20歳から30歳にかけて、ダビデの信仰を成長させたのは、苦難の中での忍耐である。逆境の中で忍耐が切れそうになるときがある。特にプライドを傷つけられたときである。自分を侮辱したナバルに対して復讐しようとしたダビデ、それを止めたアビガイル。彼女は、逆境の中にあるダビデを支える妻となった。20歳から30歳のダビデを支えたのは「女の愛」。その女性を奪われたとき、ダビデは「主によって奮い立って」、彼女を取り戻した。

■本日の内容 ダビデ② 30歳から50歳【ソロモンの誕生】まで (BC1010 - BC990)

1. サウルの将軍であったアブネルがサウルの子イシュ・ボシュテを擁立する (2章)
 - (1) 9節 中核となったのはベニヤミン族。これに加えて、ヨルダン川東側のギルアデ地方 (北部はマナセ族、南部はガド族とルベン族の割り当て地)、西側北部のアシエル族とイズレエル地方 (イッサカル族)、西側中部のエフライム族が支持。
 - (2) アブネルは、サウルのおじネルの子 (Iサム14:50)
 - (3) イシュ・ボシュテ40歳は、ユダ部族を除く全イスラエルの王となった。
 - (4) 拠点、マハナイン (ヨルダン川東側の町)
 - (5) 12~22節 ギブオンでの内戦。ダビデの将軍ヨアブの弟アサエルは、アブネルを追って戦死する。これが後に、ヨアブによる復讐につながる。
2. それから2年の間に、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった (3:1)
3. ヘブロンにいた間 (7年半) にダビデは、妻2人→6人、それぞれの妻にひとりの息子を得て6人の男子を得る (3:2~5)
4. アブネルがダビデと交渉するも、ヨアブによって殺される。アブネル殺害にはダビデが関わっていなかったことは全イスラエルが認める (3章)
5. イシュ・ボシュテが暗殺される。ダビデは暗殺者を処刑する (4章)
 - (1) 2:10 イシュ・ボシュテが王であった期間は2年
6. それから5年半の間に、ダビデのもとに全イスラエルから続々と人々が集まる (I歴12:22~37)
7. ダビデ 37歳 は全イスラエルの王となる (5:1~5)
 - (1) I歴12:38~40
 - (2) 5節 ダビデは、ヘブロンで7年半、エルサレムで33年、計40年間王であった。
8. シオンの要害を攻め取り、「ダビデの町」と呼ぶ (5:6~13)
 - (1) 8節 攻め取ることができたのは、ダビデが「水汲みの地下道」を知っていたから。部下たちに命じて、そこを抜けて要害に侵入させた。
 - (2) その周辺は、ダビデが少年時代に羊飼いをしていた場所、地形や水場に精通していたことと推測される (Iサム17:54「彼の天幕」)
 - (3) 9節 ミロから内側にかけて、回りに城壁を建てた。

- (4) 10~16 節
- ① ダビデはますます大いなる者となった。主がともにおられたからである。
 - ② ツロの王ヒラムはダビデと友好関係に入り、杉材、大工、石工を送り、ダビデのために王宮を建設した。この建設工事の完成時期は、後述 11. のペリシテ人からの攻撃を退けたあと、12. のとき。
 - ③ ダビデは、次のことを知った。
 - 主が、ダビデをイスラエルの王として堅く立てた。
 - 主が、ご自分の民イスラエルのために、ダビデの王国を盛んにされた。
 - ④ エルサレムで生まれた子たちの一覧 11 人 (I 歴 14 : 4~7、13 人)
 - このうち、妻の名が明らかなのは、バテ・シェバ
 - 13 人のうち、4 人は、バテ・シェバによる子たち (I 歴 3 : 5)
 - 別にそばめたちの子たちもいた (I 歴 3 : 9)
9. 主の箱をダビデの町に運び入れることについての合議 (I 歴 13 : 1~4)
10. 主の箱をダビデの町に運ぶ 1 回目 (I 歴 13 : 5~14、II サム 6 : 2~11)
- (1) I 歴 13 : 7 神の箱を新しい牛車に載せて運ぶ
 - (2) I 歴 13 : 8 ダビデと全イスラエルが、歌を歌い、楽器を鳴らして、神の前で力の限り喜び踊った。
 - (3) I 歴 13 : 10 御者をしていたウザが手を箱に伸べて押さえようとした
 - ① 民 4 : 4~6、15、17~20 神の箱は、レビ族のケハテ支族が肩に担う
 - ② 民 7 : 3~9 牛車の使用禁止
 - ③ II サム 6 : 2~11 ウザは主に打たれて死んだ。「不敬の罪」のゆえに。
 - (4) II サム 6 : 12~14 神の箱はガテ人オベデ・エドム (ペリシテ人) の家に
11. ペリシテ人からの 2 度にわたる攻撃を退ける (I 歴 14 : 8~17、II サム 5 : 17~25)
12. ダビデの町に自分の家を造り、また神の箱のために場所を定め、そのために天幕を張った (I 歴 15 : 1) 王宮を建設したのはツロから来ていた大工と石工
13. 主の箱をダビデの町に運ぶ 2 回目 (I 歴 15 : 2~29、II サム 6 : 12~23)
- (1) 1 回目からは、3 か月後 (II サム 6 : 11)
 - (2) II サム 6 : 12 主がオベデ・エドムの家を祝福されたという知らせを受ける
 - (3) I 歴 15 : 2~15 モーセの律法の定めに従い、ケハテ支族が肩で担う
 - (4) I 歴 15 : 16~24 レビ族によって賛美歌隊を編成する
 - (5) II サム 6 : 13~23
 - ① 13 節 主の箱をかつぐ者たちが六歩進んだとき、ダビデは肥えた牛をいけにえとしてささげた。
 - I 歴 15 : 26 「彼らは」：いけにえを捧げる費用は、「ダビデとイスラエルの長老たち、千人隊の長たち」が負担した。実際にささげたのは、モーセの律法に従って、祭司である (I 歴 16 : 6、39~40)
 - ② 17 節 ダビデは主の前に、全焼のいけにえと和解のいけにえをささげた。
 - I 歴 16 : 1 「彼らは」
14. **ダビデ契約 (II サム 7 章、I 歴 17 章)**
15. 周辺諸国を征服する (II サム 8 : 1~14)

門衛のオベデ・エドムはレビ族で、別人 (I 歴 15 : 24~25)

16. ダビデの統治、「正しいさばきを行った」(Ⅱサム8:15~18)
17. サウルの家の生き残りの者、ヨナタンの子メフィボシェテを厚遇する(Ⅱサム9章)
18. アモン人との戦いの開始(Ⅱサム10章) この戦いの終結は、後述20.
- (1) 6節 アモン人はアラム人の王たちの軍隊を雇った。
 - (2) 17節 ダビデはアラム人の王たちを打ち破った。
 - (3) 19節 アラムは恐れて、それからはもう、アモン人を救おうとはしなかった。
19. ウリヤの妻バテ・シェバとの姦淫とウリヤ謀殺(11章)
- (1) 1節 年が改まり、王たちが出陣するころ、・・・ダビデはエルサレムにとどまっていた。
 - 将軍ヨアブに率いさせたイスラエル軍は、アモン人の拠点ラバを包囲。
 - アモン人との戦いは野戦(短期決戦)から攻城戦(長期戦)の段階へ。
 - (2) 2節 ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると・・・
 - 少年のときにゴリアテと戦って以来、戦いに明け暮れてきた約30年。周辺諸国平定は最後の敵アモン人の拠点ラバを包囲するところまで来た。ダビデには体力的な衰えがうかがえる(参照:Ⅱサム21:15~17)
 - (3) 11節 ウリヤの信仰 ウリヤはダビデの三十勇士のひとり(Ⅱサム23:39)
 - (4) 27節 喪が明けると、ダビデは人をやり、彼女を自分の家に迎え入れた。彼女は、彼の妻となり、男の子を産んだ。しかし、ダビデの行ったことは主のみこころをそこなった。
20. 主がダビデのところに預言者ナタンを遣わす・子の病死、ソロモンの誕生【ダビデ50歳】・アモン人との戦いの終結、(12章)
- (1) 10~14節 預言者ナタンを通して語られた罪の刈り取りの預言
 - (2) 最初の子は生まれてすぐ、主に打たれて病死した
 - ① 13節 私は主に対して罪を犯した
 - 11:4~5 姦淫の罪(レビ20:10、18)
 - 11:15 殺人の罪(出21:14)
 - ② 16~17節 ダビデの祈り
 - ③ 19~23節 「私はあの子のところに行くだろう」 その子の霊魂は、アブラハムのふところに行った。復活を待っている。霊魂の不滅とからだの復活は、信者の希望である。
 - (3) 24節 b 主はソロモンを愛された
 - ① 詩篇51編 悔い改め→赦しを受けたこと確信→24節 a 「妻を慰めた」
 - ② ソロモンの名の由来(Ⅰ歴22:9)→主からの確認「エディデヤ」の呼称
 - ③ ダビデが何歳のときにソロモンが生まれたのか? ダビデが70歳で死んだとき、ソロモンは何歳で王となったのか? 聖書には記録がない。
 - ソロモンはダビデがエルサレムで33年間王であった期間に生まれたので、ソロモンが王となったときは30歳以下であることは確実である。
 - Ⅰ歴29:1「わが子ソロモンは、神が選ばれたただひとりの者であるが、まだ若く、力もなく、・・・」とあるので、20歳前後で王となったと推定される。→ソロモンの誕生は、ダビデが50歳、紀元前990年頃